

氏名	おお かつ まさ み 大 上 正 美
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 388 号
学位授与の日付	平 成 12 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	阮籍・嵇康の文学

論文調査委員 (主査) 教授 興膳 宏 教授 川合康三 教授 池田秀三

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目指すところは、圧倒的な政治権力の前で生の危機にさらされながら、そこでの厳しい現実認識をこそ媒介として、表現次元へと自己を押し上げていった阮籍・嵇康の表現者として自立する姿を、個々の作品に即して追究し、阮籍・嵇康にとって文学とはどのような営みであったかを考えることである。その際、阮籍・嵇康の周辺にいた人たちの生涯と文学との関係を対置し、阮籍・嵇康の文学の位相を照射する視点を設けること、さらに、百五十年後の陶淵明へとどのように受け継がれ、深められたかの見通しを探ることも試みる。

まず、阮籍・嵇康の文学を考えるための前提となる基本的な考え方を、「序に代えて——阮籍・嵇康の生と文学」で述べる。阮籍・嵇康を文学的に読むとはどういうことか。七賢に共通する、苛酷な政治情況を生きる言動次元の偏激性に、その文学性の一端を認めることができる。しかし阮籍・嵇康の文学はそれにとどまるものではない。苛酷な現実の前では自己が自己であり得ないとする厳しい現実意識・情況認識を媒介として、自己が自己であろうとして表現次元へと自己を押し上げていく真の文学の深まりが見られるとし、それを個々の作品に即して分析していこうとするのが本論文の全体を貫く目指すところと方法である。つまり、阮籍・嵇康の文学性がいついかなる生の場で立ちあらわれるかを作品を通して見ようとするのである。また、その生の場と立ちあらわれ方は、本来的な自己の生を生きようとするが故に表現次元を必然とする六朝言志派たちに通底する問題だとして、陶淵明にもその典型を見ることができるとする。

本論は、Ⅰ「阮籍の文学」、Ⅱ「嵇康の文学」、Ⅲ「阮籍・嵇康の周辺」、Ⅳ「陶淵明の文学をどのように考えるか」の四部からなる。

ⅠとⅡは、阮籍・嵇康の多様な作品を、処世次元に還元して読むのではなく、それぞれの作品に即して内在的に読み、表現構造、文体の意味、レトリック、そこでの方法を個々に析出し、そこに内在する情況との関わりの問題を阮籍・嵇康の内側から検討し、その多様な言志の具体的様相を確認する。そして、厳しい現実認識を媒介として、表現次元を必然とした多様な営みであったことを位置づける。

Ⅰの第一章「『詠懐詩』試論——表現構造にみる詩人の敗北性について」では、阮籍の「詠懐詩」五言八十二首の連作の基本的な表現構造を現実逸脱とその不可能性とに見る。作詩の時と場とを喪失してしまっているが故に逆に、その表現構造そのものが本質的な現実との関係を抱え込んでいるとする観点から論じる。つまり、そこには現実においても敗北し、詩空間においても敗北する二重の敗北性が見てとれるが、そこにこそ阮籍の激しい倫理性と表現者としての醒めた眼とが一貫しているとする。第二章「『為鄭冲勸普王牋』について」では、いわゆる勸進文という公的な文章を一個の文学作品として読むことを試み、そこに阮籍の文学の本質と通底するものを見ようとする。そのためにまず、制作年代の考証を行い、旧説を改めて新たに景元二年説を立て、旧二説がとるような政治的な有効性からの読みができないことを確認する。次に、前代の荀攸の勸進文との比較検討から、阮籍独自の執筆姿勢と情況認識とを探り「詠懐詩」に見られた阮籍の文学の本質——激しい倫理性と共存する表現者としての醒めた眼をそこに認めるのである。第三章「阮籍と情況——伏羲との往返書簡」では、伏羲との往返書簡の存在によって、阮籍が生きた情況の難しさの実態を、阮籍の外側と内側との双方からあますところなく知ることができるとする観点から論ずる。体制の側からどのような論理とレトリックをもって攻撃が加えられたか、それに対し

て阮籍はどのような論理と言説をもって情況に応接したか、について分析する。往返書簡の存在によって明らかにされた苛酷な情況と阮籍との緊張を孕んだ関係を把握することによって、情況から仮構を必然とする阮籍の表現の意味がこの先に見えてくるとする。次に、情況から仮構を必然とする営みの実態とその意味とについて、第四章『達莊論』と『大人先生伝』で探る。「論」という仮構の枠組によって自己の思想の根拠と強度を再確認し、「伝」という事実の記録を逆手に取ってあるべき自己の姿を次々に求める自己劇化を試みたとする。

Ⅱの第一章「絶交書二首に見る表現の位相」では、二首の一方は存分に自己を語り、一方は自己を語ることを拒絶している、その対比に注目し、二首それぞれの構成・頻用語句・用事・比喩などの表現次元からの分析を通して、苛酷な政治情況下刑死させられる嵇康の苦しみの内面を浮かび上がらせ、嵇康における文学営為の意味について考える。とくに「与山巨源絶交書」に関しては、自責を徹底することを方法として、自己が自己であることを許さない現実を衝く、と見る。第二章『答二郭詩』に見る自立の契機』では、贈答詩という時と場とを契機として自立する嵇康の精神を確認する。世俗を否定する精神の内部にすら忍びよる危機を友人のあいまいな発言の中に見抜き、それを激しく衝いてまで、危機意識を先鋭化させながら自己のあるべき姿を求めて自立しようとする嵇康の精神を、「答二郭詩」の中に具体的に読みとる。第三章『述志詩』における言志の様相』では、「幽憤詩」と「述志詩」との言志の様相の差に注目する。「述志詩」は自己の正当性を自他に確認する詩であり、対自性の深まりという観点から「述志詩」の先に「卜疑」、さらにその先に、自責を徹底させることによって時代を撃つ声が響いてくる「与山巨源絶交書」、「幽憤詩」があることを確認する。第四章『「卜疑」試論』では、「卜疑」がならった屈原の「卜居」と比較しながら、もはや屈原のような単純な二者択一の生ではあり得ない嵇康の内面を見る。つまり、「卜疑」は、俗世を否定した先にどのような生が可能かを模索した、当時の目覚めた知識人に普遍の課題である内面の分析に実験的に立ち会った作品であった、と位置づける。第五章『「管蔡論」の方法——嵇康と情況』では、周公旦の聖性を絶対とする前提命題によって、二叔の弁護を形式論理的に成立させたところに、嵇康のすぐれたレトリックがあり、それは、周公旦になぞらえられる司馬昭体制が強いる思考の枠そのものを相対化させる方法であったと論じる。このような単純な情況批判でない営みにこそ、表現者としての嵇康の表現の位相があるとするのである。

Ⅲは、阮籍・嵇康の周辺にいた阮咸、劉伶、山濤、さらに鍾会の生と文学をとりあげ、彼らの主体的な営為がどのように認められるかを見る。彼らを阮籍・嵇康に対置してみることによって、阮籍・嵇康の文学の深まりが明らかになるとする立場からの考察である。第一章「阮咸評伝」では、『晋書』の阮咸伝を検討しながら、阮咸は阮籍的生の明なる領域を生きることとストイックなまでに引き受け、酒と音楽、そして恋愛とに自己の豊かな内面を示した自由人であったことを論じる。第二章「劉伶論——生と文学の位相」では、劉伶はその言動と「酒徳頌」一篇とに自己の心と思想とを託し、苛酷な現実を生きる複雑な内面を見事に封じこめた、つまり、生涯の言動と文学とは同じ地平に存在したと位置づける。第三章「山濤——『貴顕の自由人』の前半生」では、貴顕の生ゆえに七賢の中で異質とされることもある山濤は、しかし決して単純な体制順応派ではなかったこと、とくに前半生の、情況に対して主体的な選択をし続けた具体的な姿を確認する。第四章「鍾会論」では、これまで阮籍・嵇康の敵役としてみられるだけで、その内面がまったく顧みられることがなかった鍾会もまた、苛酷な時代情況の中での悲劇の人であったことを論じる。また、阮籍や嵇康に共感しながらも、彼らのように真の思想家たり得ないコンプレックスを抱えこんでいた内面こそが悲劇の要因の一つであったことを論じる。

Ⅳは、どのように陶淵明を読めば、その文学の深さと豊かさが確認されることになるか。文学と現実の関係、文学における思想とは何か、という嵇康・阮籍について考えた問題視点の継承とその展開とを見通す視点を探る。まず第一章「六朝詩文の考え方——阮籍・陶淵明・謝靈運」では、陶淵明を基軸にした六朝詩文に対する考え方を提出する。陶淵明は六朝文学に異端の詩人なのではなく、文学と現実の生の嵇離という六朝的な問題をまっとうに引き受け、そこにおいて豊かな内実を示したからこそ、同時代に屹立した存在であったのであるとする。第二章「阮籍・嵇康から陶淵明へ」では、どのように阮籍・嵇康から陶淵明へと展開され、そこでの陶淵明の文学の様相はどのように深められ豊かになったかについて考える。第一節「阮籍詩と陶淵明詩——日夕の感受をめぐって」、第二節「嵇康『家誠』と陶淵明『与子儼等疏』」で、かくあり得ない自己でしかない阮籍・嵇康と、かくある自己、かくあり得た自己を語る陶淵明とを比較検証する。第三章『「飲酒其五」試解』では、第一節『「欲弁己忘言」について』で、莊子のことばを使用しているからこの詩が思想詩だ、というのではなく、その思想内容のあるべき実在（真なる空間）への手続き（方法）と化し得ているからこそ、この詩が思想詩として自立しているのだということを、同じ「忘言」を使用する魏晋の詩と比較することによって論じる。第二節『「飲酒其五」注解』で、どこ

にこの詩の深さと豊かさがあるのかを、すべての詩句・詩語を再検討することによって考える。陶淵明の多様な世界と政治的・倫理的・美学的・文学史的な問題点とが、この一首から広く深く解きほぐされていくとする視点に立っている。第四章「陶淵明研究の可能性」は、第一節で「戦後の陶淵明論の出発」として吉川幸次郎『陶淵明伝』を位置づけ、悟りきった陶淵明像ではない、矛盾する誠実な詩人の内面性と、しかもなお哲学を求める精神とを分析し、戦後のわが国の陶淵明研究の出発になったことを確認する。第二節で「陶淵明論の行方」として、完膚無きまでに陶淵明の詩と真実への疑問を提出した岡村繁『陶淵明』の陶淵明研究上の意義を評価しつつ、にもかかわらず、そこから逞しく蘇生する陶淵明論はどのように可能かを探るわれわれの研究の課題と展望を述べる。第五章「陶淵明と顔延之」では、二度の機会をもった顔延之にとりて陶淵明はどのような存在であったかを論じる。不遇の顔延之にとって大きなよりどころであった一度目の交友。そして八年後の二度目の交友では、すでに地位も高くなっていた顔延之は左遷される憤懣をぶつけるのだが、しかし陶淵明に対しては庇護者のように接している。陶淵明という存在の顔延之の生涯に於ける意味の変容から、顔延之の文学と生涯との切り口を見る。

なお、附論として、修辞に過度に傾くとされる南朝文学を代表する文学者、顔延之、江淹、蕭綱、それぞれの生涯における文学の意味について、従来の評価にはなかった嵇康・阮籍・陶淵明の問題とも通底する「言志」の精神とその様相について考える。

(一)「顔延之論——阮籍受容の顔延之的意味について」では、現実と文学の二元論自体を生きながら、深く激しい阮籍受容によってかろうじて時代に屹立した点にこそ、過度の修辞技巧を代表する詩人という従来の評価だけでは決しておさまきれない、顔延之の存在意義があったということについて論じる。(二)「江淹の挫折——建安呉興の令左遷をめぐって」では、高度な修辞技巧ばかりに意を用い、その生涯の苦闘が文学に反映されていないと裁断されてきた南朝詩人において、江淹もまた、それを代表する文学者と見なされてきたが、ここで、江淹なりの誠実な生の苦闘を浮き彫りにし、そこでの苦い挫折の体験こそが、彼の生涯においては「志」を欠落させ、文学にあっては修辞に走らせる大きな要因になったことを論じる。(三)「蕭統と蕭綱——『文選』と『玉台新詠』の編纂を支える文学認識」では、両者の文学論を対比しながら、中国文学における表現(美)と現実(生涯)との関係の基本を見ようとする。とくに蕭綱において、これまで見のがされがちであった最晩年の文学宮為が「文章放蕩」の立場を自らつきくずさざるを得ないものであったことを論じ、同時に、表現と現実との関係の原点に立ちかえるという意味で、唐代文学を招来する一翼を担った文学史上注目すべき文学であることを指摘する。

論文審査の結果の要旨

阮籍(210～263)と嵇康(223～262)といえ、一般には、魏・晋の王権交替期にあって、世俗を避けて竹林に遊び、自由な生を楽しんだ「竹林の七賢」の代表格として知られている。しかし、実際の二人は、新旧の政治権力の激突する苛酷な状況下において、絶えず生の危機に身をさらしながら、その厳しい現実認識を媒介として、自己の思索を優れた文学に昇華させた存在として、中国文学史上に重要な位置を占めている。本論文は、阮籍・嵇康の詩文をそれぞれの作品に即して内在的に深く読み込むことを基本方針としつつ、表現構造やレトリックを通して、彼らの文学の本質に迫ろうとする試みである。

本論文は四部から成る。第一部では阮籍の文学を、第二部では嵇康の文学を、それぞれ詩文の双方にわたって幅広く取り上げ、個々の作品をその内部に分け入りながら、綿密な検討を加えている。第三部では阮咸・劉伶・山濤・鍾会といった、阮・嵇の周辺にあって二人とさまざまな交渉のあった人物群を俎上に載せ、彼らを阮・嵇に対置することによって、外面から二人の文学の持つ意味を掘り下げようとしている。さらに第四部では、阮・嵇の死から百五十年のちに生まれた陶淵明(365～427)の文学を対象にすえて、二人の文学上の達成がいかに陶淵明において継承され、新たな展開を示したかという観点から考察を深めている。

阮籍・嵇康の生きた時代は、司馬氏が魏の篡奪を企てて、着々とその準備工作を進めつつあった時期だったため、司馬氏に対して強い批判を抱く二人は、自らの言動についてきわめて慎重な態度を持せざるを得なかった。「白眼」の故事など数々の奇行によって印象づけられる阮籍の逸話は、一種の韜晦の姿勢を示すものにはかならなかった。『文選』の注者である唐の李善が、阮籍の連作五言詩「詠懷詩」について、つとにその難解さを嘆息しているように、阮籍の作品の多くは隠微で屈折した表現に包まれており、そこに託される作者の真意を理解するのは容易ではない。本論文の特色は、外的な状況から作品を読み解くのではなく、何よりもまず作品自体を通して、そこに内在する状況とのかかわりかたを検討する方法を一貫して

持続していることである。

たとえば、阮籍と伏羲なる人物との間にかわされた往復書簡を取り上げて、阮籍が生きた状況の困難さを、彼の外側と内側から解き明かしている。司馬氏の体制側に立つ伏羲の主張は、良き時代である今の世にあって、君子たる者は積極的に世に出て活躍しなければならないという認識にもとづきつつ、阮籍の反俗的な処世を批判するが、阮籍は相手の論点に対して直截的に反論することを避け、鳳凰と小鳩を用いた比喻によって、二項対立的に大なる存在と小なる存在を併置し、両者にそれぞれ異なった意味を認めることを通じて遠回しに相手を論じている。一元的な価値観を強要する相手に対して、より高い次元に立って思考することを勧めているのである。阮籍の文学を論ずる人は多いが、伏羲との往復書簡によって「詠懐詩」を生み出した彼の複雑な心性を照射する試みは、十分に新鮮な問題提起といえる。

論者によれば、この往復書簡に見える現実の状況の中での批判と反批判という枠組みは、自己の思想を展開する論文において、仮構の世界を設定しつつ、架空の論難者との対話により自分の見解を述べる構想へとつながってゆく。「大人先生伝」では、大人先生という理想的な超越者を設定する物語的な枠組みの中で、礼法の士や隠士などとの対話を通して、彼らの思想を次々と批判しながら、「超人の絶対的な生の姿がその彼方に思い描かれる」のである。「伝」とは、もともと「事実の記録」を意味することばだが、阮籍はそれを逆手に取って、あるべき自己の姿を求める自己劇化を試みた、と論者は考える。このように阮籍の散文作品を彼の文学世界に組み込んで、総合的に彼の文学を検討するという構想は、とかく「詠懐詩」にのみ片寄りがちだった阮籍研究に新たな視点を導入したのものとして評価できる。

一つのジャンルに偏せず総合的に文学を把握しようとする態度は、嵇康の文学の研究にも引き続いて見られる。ここではまず、嵇康の人生の最も危機的な状況において書かれた二篇の絶交書の分析を通して、苦悶する嵇康の内面を考察している。まず「山巨源に与えて絶交する書」では、嵇康はきわめて饒舌な筆致で、自分の種々の欠陥を露悪的なまでに告白しながら、自分という存在を開示している。そこに「自己が自己であることを許さない現実を衝く」意味を論者は認める。他方、「呂長悌に与えて絶交する書」になると、単に友人の裏切りに関する事実の経過を淡々と述べるだけで、自己の心情については一切黙して語らない。論者はそこに、嵇康を取りまく状況の深刻化を推察するとともに、それが同時に「沈黙への意志」を表明したものであると説いている。

「卜疑」は、屈原の作に擬せられる「卜居」の文体に倣った韻文である。「卜居」では、人生のさまざまな疑問を二者択一的に提起しながら、ゆるがぬ自己の信念を披瀝する構成になっているが、「卜疑」では「屈原のように俗世への嫌悪を激しくすることによってその意志を絶対的にするのでなく、そこにたじろぎ臆する」作者の姿、いいかえればもはや「二者択一の生ではありえない」複雑な嵇康の内面が見出される、と論者はいう。また、聖人周公への反逆を企てたことによって、後世に長く悪名を遺した管叔・蔡叔を敢えて弁護した「管蔡論」では、司馬氏の体制を周公のそれになぞらえることによって、現体制が強い思考の枠を相対化させる意味があったと評価している。いずれも、嵇康に対する新たな視座を提出した有力な試論として、十分な検討に値する論であろう。

阮籍・嵇康をめぐる人物群、いわば脇役たちの側から二人の文学を照射するという発想は、これまでの研究には比較的乏しかったものである。ことに嵇康を刑死に至らしめた告発者としてのみ見られてきた鍾会のような人物に着目して、その内面を分析し、嵇康の文学の理解に立体感をもたらしたことは意義深い。

陶淵明は、その作品中で阮籍・嵇康の文学に直接言及することはないものの、苛酷な現実を生きる心情の表白と作品の奥に湛えられる深い思弁性を通して、二人の文学を発展的に継承した跡が認められる。論者によれば、かくありたい自己を追求しながら、それを現実には否定型でしか語れなかった阮・嵇に対して、陶淵明は「かくある自己、かくあり得た自己を語る」ところに特質が存する。阮籍・嵇康から陶淵明への文学の発展形態の一面をいい当てた見方として注目すべきであろう。

ただ、阮籍の「詠懐詩」が作者の現実の生活を全く遮断しているのに対して、陶淵明の詩の多くが日常生活の投影を強く感じさせるという両者の異質性を超えて、彼らの文学の本質面での共通性をいかに把握するかという問題は、まだ十分に解明されておらず、今後の研究課題として残されている。また、阮籍における「二重の敗北性」といった論者独自の用語が、生硬な概念規定のまま一人歩きしているため、論理が上滑りしがちなところが間々見られるのは残念である。しかし、それも全体的にはあくまで微瑕といってよい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年2月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。